

はじめに

神社史料研究会の研究発表の成果を纏め上梓した「神社史料研究会叢書」は、すでに第一輯『神主と神人の社会史』、第二輯『社寺造営の政治史』、第三輯『祭礼と芸能の文化史』、第四輯『社家文事の地域史』、第五輯『神社継承の制度史』の五冊を世に送ったが、ここに新たに古来より全国的な規模での広がりを見せ諸方面に大きな影響を及ぼしてきた神社、神社信仰に焦点をあてた研究会叢書の刊行方針のもと、第六輯として『賀茂信仰の歴史と文化』を上梓する。

顧みれば、第五輯の「あとがき」でも述べたところであるが、神社史料の種々の分野からの有効利用、研究の深化を目標として神社史料研究会が発足したのは、平成六年（一九九四）十二月十一日のことであった。東京神田の学士会館での第一回の研究会に参加の諸氏は四十八名。名称が神社史料研究会ではなく、神社史料研究会となったのは、神社史料は、たんに神社、神道の研究に資し宗教史等の素材を提供するにとどまらず、前近代における神社という存在の社会的位置からいっても、地域史、政治史、社会史、経済史、文化史はいうに及ばず、文学、芸能、音楽、風俗、民俗、建築、土木等を初めとする広範な分野の研究に資するはすのものであり、神社・社家及び関連の所々に所蔵・架蔵されるところの神社史料に焦点をあて研究を進化させていこうとする趣旨である。

爾來、二十六年。本会の発足時においては、神社及び神社史料に関する研究、とくに近世期における究明は極めて希薄であったのみならず、一部には研究そのものを敬遠する傾向にさえあつたように思われた。しかし、いまはどうか。状況は一変して、往々にして見られた所の、神道、神社に対する偏見もあまり見られなくなったようであるし、研究も盛んになって来ている。史料に則した実証的な研究も多く見られるようになっていて、実に隔世の感さえある。第五輯の刊行により一区切のついた翌々年の平成二十三年五月、神社史料研究会に対し、財団法人神道文化会（名誉会長久邇邦昭、会長田中恆清）からその功績を認める表彰状を受けた。内容は本会の全体を簡潔に表するものであり広く知って頂くためにも記録に留めておきたい。

「貴会は平成六年十二月発会后、東京大学史料編纂所他で研究会を、また毎年一回夏季に全国著名神社の協賛を得てセミナーを開催し、その折に発表された論文を選び、神社史料研究会叢書を刊行されました。これらの業績は、神社及び社家に伝承される史料を十分に活用して纏められており、神社史研究にとつて有益な論文集と評価されます。仍つて茲にその功績を讃え表彰します」という有難いものであつた。然るべき大社に協力を依頼し、正式参拝の後、毎回五、六本の研究発表を二日に亘り行い、最後に史料類の拝観をさせて頂くというサマーセミナーに様々な分野の研究者が多数集い、継続して今に至っているが、これも神社当局の支援あつてのことであり感謝しているところである。更なる継続と研究の深化を図っていきたい。ここ数年いわゆる御朱印ブームが続いているが、心なしか前途も明るく思われてくるのも不思議である。

さて、本書でとりあげる賀茂の社であるが、古代には祭といえは賀茂祭（葵祭）、京都といえは賀茂川が連想されるように、京都を象徴する賀茂川の上流に鎮座し、往古より近世末に至るまで賀茂川の水支配をしてきたのが賀茂別雷神神社であり、賀茂川と高野川の河合近くに鎮座しているのが賀茂御祖神社である。前者は上賀茂社、後者が下鴨社、鴨社と略称されることもあり、両社合せて賀茂下上社、或いは賀茂上下社と称された。平安遷都以来、王城鎮護の社として伊勢の神宮に次ぐ朝野の崇敬を受け、また諸国に膨大な荘園を有し、此により賀茂信仰が諸国にも弘まり多くの分霊社も存する。近世には、上賀茂社は二千五百七十二石、下鴨社は五百四十石の社領（朱印地）を有し、明治維新後は官幣大社に列した。そして、その首位に置かれたのが、賀茂別雷神社、賀茂御祖神社であった。

これほどの神社でありながら、賀茂下上社とも纏まった神社史といえる程のものは無かった。前近代には各社家の努力により、上社では『賀茂群記類鑑』『賀茂史略』『賀茂註進雜記』等、下社の『賀茂皇太神宮記』『賀茂社旧記』『賀茂史綱』などの著作があるが、全国的に著名な社では古文書等の公刊も進められてきたなかで、社蔵史料の十分な調査もなされていないという状況が続いていた。嘗て、小生は東京大学史料編纂所に在職中の平成三年より十年にかけて、近世の社寺日記、殊に京都や奈良の然るべき神社寺院に所蔵される日記類を調べる機会があり、所々に於て長期にわたり筆録された大量の日記が伝存していることが確認された。そして明らかになったことは、近世の日記に概していえることであるが、ことに社寺の日記類はほぼ原本

であり、その量は膨大であり、粗雑な扱いしかされてきていない、ということであった。近世の社寺日記はこれまで歴史学の分野に於てさえ殆んど注目されて来なかった。そこで調査したものについては、保存と利用を図るためにも、全ての日記の目録を作成し、全てとはいかないまでも経費と時間の許す限り出来るだけ多くを写真撮影し、紙焼き・製本をして東京大学史料編纂所の書庫に排架し、研究者の利用に供すよう、努めたところである。

その内、賀茂御祖神社、賀茂別雷神社の分をここで記録しておきたい。まず、賀茂御祖神社における近世日記の調査は、平成三、四の両年に亘り行い、昭和四十五年度虫ほし分類目録として作成された「古文書関係目録・宝物台帳登録目録・貴重品台帳登録目録」(タイプ印)にも登載されていなかった、近世の膨大な日記類が社務所北側の藪の中に建っていた小さな倉庫のなかから見出された。美濃判大の袋綴本で、表紙には「年行事日次」「日記」等とある。一月で一冊のものもあるが、二、三ヶ月一冊のものが多く、丁数は七〇〜一二〇丁で、一括して史料名をつけるとすれば『賀茂御祖神社日記』と題すべきもの。欠年の分もあるが、元禄十四年(一七〇一)より慶応四年(一八六八)に及び、都合六八一冊。写真撮影は最初の冊より寛政三年(一七九一)分まで、三六八冊。他に下鴨社家の日記、『鴨縣主長尹日記』(安永四年(一七七五)〜寛政十三年(一八〇一))五冊。『鴨縣主長将日記』(文政八年(一八二五)〜天保十五年(一八四四))八冊。これらは全てを撮影した。また他にも『日記恒例部類』(文化四年(一八〇七))一冊、『江府日記』(宝永八年(一七一一))一冊、『御神領御朱印御改

御用関東下向仕払帳』（延享三年（一七四六））一冊など、記録類二十一冊が確認された。

賀茂別雷神社では、庁屋の南側に位置する校倉に収蔵されている日記類を調査。平成七年より十一年に至るまで、前後五回に亘る。これらはいわゆる慳貪けんどんの書物箱二十箱（一番箱～廿番箱）に格納されていた。大判の豎帳（縦三二・横二五センチ程）であり、一冊には二月から翌正月までを記載、厚さ二〇センチに及ぶものも多い。表紙には「社中日並記」「日並」「日次記」「社記」「社記假附」などとあるが、一括して『賀茂別雷神社日記』と称すべきもの。寛文五年（一六六五）より明治二十一年（一八八八）に及び、都合一〇二五冊を数える。このうち最初の寛文五年より元文五年（一七四〇）までの分、八四冊を写真撮影した。また、社家の日記として、次のものが伝存していた。『満久日次記』（寛永十六年（一六三九）～正保二年（一六四五））一冊。『維久記』（寛文四年（一六六四）～天和四年（一六八四））二冊。『矩久記』（寛文六年（一六六六）～貞享二年（一六八五））五冊。『就久記』（延宝八年（一六八〇）～元禄七年（一六九四））六冊。『清令日記』（寛文六年（一六六六）～宝永八年（一七一一））三九冊。『清茂日記』（元禄五年（一六九二）～享保廿年（一七三五））四一冊。『清足日記』（享保二年（一七一七）～安永六年（一七七七））五二冊。以上は全てを撮影した。なお、『清茂日記』については早く児玉幸多氏の研究により知られていたが（賀茂清茂伝、『歴史地理』、昭和十二年十二月号）、他は殆んどその存在すら一般には知られていなかったものである。このように、賀茂両社を初めてする社寺における近世の日記の発見、調査における思い、感慨がやがて当会、神社史料研究会の

発足へと発展していくのである。また、悉皆調査の必要性を神社当局に説明すると共に、京都府への働きかけを行うのは自然の成り行きであった。かくて、京都府教育委員会が文化庁から補助金を受け、当時奈良大学教授藤井学・大谷大学教授大山喬平の両氏が主任調査員、二十人の調査員により調査は始まった。平成九年八月のことである。収蔵庫・土蔵・校倉・社務所などに分蔵されていた文書記録類を庁屋ちやうのやに運び、板間の上に座り込み月に四〜五日間、寒暑を厭わず調査に加ったことがいまに忘れ難い。そして、六年に亘る継続調査を経て、十五年三月に京都府古文書調査報告書第十四集『賀茂別雷神社文書目録』（七七九頁）の刊行をみた。古代から近代にかけての文書記録類一万三六〇〇点余が目録に収載されている。十八年三月には一括して国の重要文化財に指定された。さらに同年三月には調査員の分担執筆により二十一篇の研究成果を収めた『上賀茂のもり・やしろ・まつり』（大山喬平監修、思文閣出版）が出版された。すでに下賀茂については『鴨社の絵図』（五篇の論考を収載、平成元年五月 糺の森顕彰会発行）が刊行されているから、賀茂研究は漸く進んできたといえよう。

本冊に収載した論考八篇は、賀茂両社に関するもの三篇、上社が三篇、下社が二篇である。内容に順序はなく、適宜配した。便宜それらの論文の要旨を述べる。

嵯峨井建「賀茂社祭神とその歴史の変遷」は、祭神をぬきに神社研究は成り立たないという観点から賀茂社の祭神について考察したもの。賀茂伝説について改めて詳細に検討し、上社は賀茂別雷神であることに一貫して変らないが、下社の場合は祭神は一社の根幹にかかわる問題

ながら、時代により御祖神の意味、祭神名そのものにも変化があり、その事情等を考察する。

黒田龍二「建築と祭儀から見た賀茂社本殿の意義」は、賀茂両社の本殿はともに東西に並ぶ三間社流造で、神社建築で最も多い流造の典型とされているが、造替方法は上社と下社に違いがあり、下社の場合は一般的な本殿造替方式であるが、上社は特殊で、仮殿を造らないという点などで神宮式年遷宮と著しい共通点が見られることを指摘し、本殿の性格等につき究明する。京條寛樹「賀茂御祖神社殿の変遷」は、鴨社の社殿は都合三十三棟が国宝・重文に指定されているが、建築史的に価値の実態は明らかにされていない現状を踏まえ、文献に現れた社殿を草創期から平安期を中心に詳細に検討し、社殿が整備されていく経緯を明らかにすると共に、中世以前の社殿景観を描く「鴨社古図」につき、その成立年代を考証し、新説を提示する。

樋笠逸人「鴨社古図（賀茂御祖神社絵図）と賀茂社御参籠」は、中世の代表的な社頭絵図とされている鴨社古図の成立年代について既往の見解を整理し、建物の名称・状態を記した押紙、小川や堤との距離などを示した書入れを具体的に検討して「御所」の押紙の意味を考え、後白河院の参籠を目的として造営された「外御所」であることを明らかにし、論を展開している。

森本ちづる「上賀茂社の忌子」は、古代より明治初年まで上賀茂社に存続した女性祀職である忌子いむこの詳細を明らかにした論考。既説では上代の齋院の後身とか、御阿礼神事に奉仕の阿礼乎止売や齋院代などとするが、認め難いことを論証し、物忌童女であり御戸開神供奉で祭神の御側近くに祇候し、神田神事である土解祭・植御祭・御田刈神事などに奉仕したことを考察。

山本宗尚「上賀茂神社競馬会神事の儀式次第の変遷」は、上賀茂社で例年五月五日に齋行の競馬神事くらべうまに関する専論である。宮中武徳殿の競馬の儀式に淵源し寛治七年（一〇九三）の起源とされる賀茂競馬の儀式次第を綿密に考証。まず現行を確認し鎌倉期、室町期、江戸期、明治期以降に分け、時代における差異を逐一注記する。社家にして乗尻の体験もある貴重な論考。間瀬久美子「賀茂下上社の雨乞いと朝廷の祈雨再興」は、近世天皇・朝廷の宗教的機能について、災害祈禱のうち民衆生活に最も関係深い早魃時の、雨乞いと朝廷の祈雨を素材に考察した。具体的には明和七年（一七七〇）の早魃に対する賀茂神領農民の雨乞いと禁裏御用水拝領に関する諸問題、後桜町天皇が再興を図った朝廷の祈雨儀礼について私説を展開する。

宇野日出生「御棚会神事と賀茂六郷」補遺は、古来より基盤社領である賀茂六郷と密接な関係を今に残す重要祭祀である御棚会神事に関する前稿（第五輯『神社継承の制度史』所載）の補遺。新出の重要史料である、①『小野郷肝煎并棚飾次第』、②『御棚飾様之覚』、③『目代々次第』の三点を紹介・解説し、②の注目すべき部分を翻刻。基盤の御結鎮銭みけちせんの算用を務めた目代々を考証する。賀茂下上社に関する初めての論文集であり、賀茂研究の一層の深化発展を期待したい。

令和二年三月

神社史料研究会代表
東京大学名誉教授

橋本政宣

賀茂信仰の歴史と文化
目次

はじめに（橋本政宣）

賀茂社祭神とその歴史の変遷

嵯峨井 建

3

建築と祭儀から見た賀茂社本殿の意義

黒田 龍二

31

賀茂御祖神社殿の変遷

京條 寛樹

49

鴨社古図（賀茂御祖神社絵図）と賀茂社御参籠

樋笠 逸人

81

上賀茂社の忌子

森本ちづる

119

上賀茂神社競馬会神事の儀式次第の変遷

山本 宗尚

155

賀茂下上社の雨乞いと朝廷の祈雨再興

間瀬久美子

181

「御棚会神事と賀茂六郷」補遺

宇野日出生

217

あとがき（宇野日出生）

研究会記録

執筆者一覧

あとがき

神社史料研究会叢書第六輯として、『賀茂信仰の歴史と文化』をお届けいたします。まずは本書の刊行が大変遅れましたことをここに深くお詫び申し上げます。早くに原稿を提出いただきました執筆者の方々には、本当に申し訳なく思っております。ひとえに委員の責任です。さらに思文閣出版の方にもご迷惑をおかけいたしましたことも、併せてお詫び申し上げます。

神社史料研究会は、平成六年（一九九四）十二月発足しました。当初は研究会代表橋本政宣氏の勤務先である東京大学史料編纂所の大会議室にて研究会を重ね、また毎年夏には、全国の神社を会場として、サマーセミナー（一泊二日、史料見学や巡見を含む）を開催してきました（詳細は、同叢書第五輯『神社継承の制度史』の「あとがき」〈橋本代表執筆〉を参照）。例会及びセミナーで研究発表された報告のうち、論文として成稿なったものは各叢書のなかに収録されています。なお発会当初は論集五冊刊行をもって一区切りと考えていたため、叢書第五輯完結をもって安堵したことも覚えています。

そして、完結直後のセミナーの時、今後も引き続き研究会をしていくか否かを話し合ったことがありました。すでに若い研究者の参加も徐々に増してきたこともあって、研究会活動は続行ということに相成りました。委員会では、叢書の出版計画も再検討されました。企画案としては、「各信仰の歴史と文化」シリーズではどうか、ということになり、まずは遷宮記念も鑑みて「賀茂信仰」に焦点を当てることとなりました。かくして第六輯が

漸く出版となったわけです。第五輯は平成二十一年（二〇〇九）に出版しておりますので、なんと十一年もたつてしまいました。委員が感心している場合ではないのですが、これもひとえに研究会々員や思文閣出版の方々の暖かい見守りがあつたからこそと、心より感謝しています。

しかしながら、問題は山積みです。特に気がかりは委員の高齢化です。大規模な学会でもない限り、この種の悩みは共通だろうとは思いますが。ただし発会当初より当日の参加費以外は不要で、入会退会も自由ですから、気軽にご参加いただけたらと思います。一度でもご参加いただき、記帳していただきますと、次回からの案内状を送付いたします。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

はなはだ心苦しい「あとがき」ではありますが、委員を代表して述べさせていただきました。最後になりましたが、本叢書の刊行に向けて常にご協力いただいております思文閣出版の皆様に対しまして、深甚の謝意を表する次第です。

令和二年四月

神社史料研究会委員

宇野日出生

神社史料研究会 研究会発表一覽

平成二十一年(二〇〇九)

第三十五回 平成二十一年度サマーセミナー

(於赤坂 日枝神社)

八月三十日(日)

山王・神田祭祀における町奉行所与力・同心の出役に

ついて

東照宮祭祀と芸能

栗田部の蓬萊祀について

八月三十一日(月)

中世東大寺における田楽頭の基礎的考察

オハケ論

上賀茂の葵使

絵巻に見る江戸中期の天下祭と川越氷川祭祀

白井雅胤と白川家八神殿・大嘗祭

平成二十二年(二〇一〇)

第三十六回 平成二十二年度サマーセミナー(於尾山神社)

八月二十九日(日)

戦国期の白山本宮惣長吏について

―系譜と在職年代をめぐって―

中近世移行期伊勢信仰をめぐる経済構造

―伊勢御師道者亮券の基礎検討―

江戸の芳春院―尾山神社御祭神の一考察―

近世香取神官の官位について

―大宮司・大祢宜の官位叙任をめぐって―

八月三十日(月)

奉納和歌・連歌の過去と現在

―大阪平野杭全神社の連歌を中心に―

織田権力の北陸支配における菅谷屋長頼について

平成二十三年(二〇一一)

第三十七回 平成二十三年度サマーセミナー(於香取神宮)

八月二十八日(日)

東国における神仏習合

―神郡・香取郡内、香取神宮周辺の仏教信仰―

近世における神社への駆込とその機能

―地域の紛争解決に果たした社家の役割―

撰家一條家による香取神宮社家への衣鉢免許

―狩衣・紫指貫・立烏帽子等着用の免許―

香取神宮の歴史と文化遺産

白山本宮惣長吏澄祝の在京活動について

八月二十九日(月)

香取神宮及び周辺の見学会(貸切バスで移動)

平成二十四年(二〇一二)

第三十八回 平成二十四年度サマーセミナー(於松尾大社)

八月二十六日(日)

院政期の神社御幸

流造本殿の形成について

川島 孝一

鶴崎 裕雄

角 明浩

笹生 衛

佐藤 孝之

橋本 政宣

川島 孝一

石田 文一

石田 文一

千枝 大志

瀬戸 薫

賀茂別雷神社競馬会神事の執行形態と儀式次第の変遷

山本 宗尚

下総国伊能家文書と吉田神道

木村 修

八月二十七日(月)

室町幕府奉公衆・熱田大宮司一族千秋輝季について

伊藤 信吉

尾崎 俊廣

松尾大社文書について

平成二十五年(二〇一三)

第三十九回 平成二十五年サマーセミナー(於箱根神社)

伊勢神宮外宮宮域支配と山田三方

谷戸 佑紀

—参宮者の保護をめぐって—

賀茂御祖神社社殿の変遷

京條 寛樹

伊豆国三嶋社の在庁職について

平成二十六年(二〇一四)

第四十回 平成二十六年サマーセミナー(於大國魂神社)

八月二十四日(日)

武蔵総社六所宮神主家と幕末の政治情報

太田 和子

—猿渡盛章・容盛と「反古帖」—

十一世紀初頭における賀茂斎院の退下後の祓について

落合 敦子

近世気比社の神官補任

角鹿 尚計

—角鹿姓馬家文書を中心に—

出雲大社の涼殿祭

関 和彦

昭和前期における「祭」研究

八王子千人同心における日光東照宮警備の意義

大東 敬明

平成二十七年(二〇一五)

第四十一回 平成二十七年サマーセミナー(於明治神宮)

八月二十三日(日)

町神輿の誕生

武水神社松田家文書所収「内侍所御固衛日記」について

岸川 雅範

—神威隊に関する新史料—

御霊信仰の成立に関する試論

中島 文晴

明治神宮創建と神社行政・神道史研究の展開

藤森 馨

—近代神社史料研究の観点から—

『鴨社古図』製作の背景と賀茂社御参籠

藤田 大誠

社職等補任の復元

樋笠 逸人

明治神宮の研究事業について

山本 宗尚

—鎮座百年に向けて—

平成二十八年(二〇一六)

第四十二回 平成二十八年サマーセミナー(於三嶋大社)

八月二十八日(日)

大阪・平野 杭全神社 奉納和歌連歌史料

打越 孝明

山村 規子・末吉 洋子

賀茂社領金津莊における室町・戦国初期における収納

寺口 学

史料から見た三嶋大社の境内とその変遷

吉永 博彰

八月二十九日(月)

賀茂祭走馬・山駆の儀の変遷

山本 宗尚

神社史料にみる祭祀・経営

奥村 徹也

—三嶋大社と関連史料—

平成二十九年(二〇一七) 第四十三回 平成二十九年度サマーセミナー(於西宮神社)

八月二十七日(日)

神社史料と歴史災害研究

加納 靖之

橘三喜の思想と庶民信仰

—長岡藩と越後—宮彌彦神社の關係に注目して— 中澤 資裕

近世における東大寺の祈禱について

畠山 聰

八月二十八日(月)

慶長九年熱田宮法楽和歌と源康総

伊藤 信吉

近世西宮神社における神主職相続とその手続き

松本 和明

平成三十年(二〇一八) 第四十四回 平成三十年度サマーセミナー(於氷川神社)

八月二十六日(日)

近世武州三峰山の宗教活動と社会的意義

—年中行事、祈禱に注目して—

下方五社別当・東泉院の神社・神道資料

徳川家康の関東入国と一宮

川田 大晶

大東 敬明

平野 明夫

八月二十七日(月)

白山相論の展開と帰結

石田 文一

武蔵一宮氷川神社の歴史と史料

中村 陽平

—氷川神社行幸を中心に—

令和元年(二〇一九) 第四十五回 令和元年度サマーセミナー(於彌彦神社)

八月二十五日(日)

近世朝廷・幕府の災害祈禱—明和期の

—下上賀茂神社の雨乞と朝廷の祈雨再興—

化政期における伊勢御師職争論について

間瀬久美子

—益谷末寿の両宮論を中心に—

吉田家江戸役所の地域的展開

笹川 裕

—越後国蒲原郡に注目して—

八月二十六日(月)

桜井神道と神祇宗

中澤 資裕

榎井神道と神祇宗

榎山 林繼

硫黄島73周年記念—日米戦没者

椎原 晩聲

合同慰霊追悼顕彰式に参列して—

樋笠逸人（ひがさ・いつと）

1985年生。九州国立博物館学芸部文化財課アソシエイトフェロー。博士（人間・環境学）。

「高御座の成立—八世紀における登壇儀礼の再検討—」（『日本史研究』第623号，2014年），「嘉承二年の『御即位次第』について」（『歴史文化社会論講座紀要』第13号，2016年），「明恵上人『夢記』の文殊現形記事について—高山寺本第一篇からの小考—」（『鹿園雑集』20号，2018年）など。

森本ちづる（もりもと・ちづる）

1970年生。明治神宮百年誌編纂室主査。修士（神道学）。

「神社祭祀における童子の奉仕—上賀茂社忌子についての一考察—」（『明治聖徳記念学会紀要』復刻第21号，1997年），「鹿島神宮物忌職の祭祀—その由来と亀トによる補任について—」（藺田稔・福原敏男編『祭礼と芸能の文化史』神社史料研究会叢書Ⅲ，思文閣出版，2003年）など。

山本宗尚（やまもと・むねひさ）

1979年生。一般財団法人リモート・センシング技術センター研究員，一般財団法人賀茂県主同族会評議員，岩戸落葉神社権禰宣。博士（理学）。

「賀茂競馬図屏風に関する一考察」（『京都産業大学日本文化研究所紀要』第15号，2010年），「三手文庫書籍に関する覚書」（『京都産業大学日本文化研究所紀要』第17号，2012年）など。

間瀬久美子（ませ・くみこ）

1949年生。千葉経済大学非常勤講師。修士（歴史学）。

「意識のなかの身分制」（朝尾直弘編『日本の近世7』中央公論社，1992年），「神社と天皇」（石上英一ほか編『講座前近代の天皇』第3巻，青木書店，1993年），「被差別集団と朝廷・幕府」（網野善彦ほか編『岩波講座 天皇と王権を考える7』岩波書店，2002年），「近世朝廷・幕府と寺社の災害祈禱—元禄16年関東大地震の祈禱を中心—」（朝幕研究会編『論集 近世の天皇と朝廷』岩田書院，2019年）など。

宇野日出生（うの・ひでお）

1955年生。京都市歴史資料館主任研究員，小槻大社宮司。修士（歴史学）。

『上賀茂のもり・やしろ・まつり』（共編，思文閣出版，2006年），『八瀬童子 歴史と文化』（思文閣出版，2007年），『神社継承の制度史』（神社史料研究会叢書Ⅴ，共編，思文閣出版，2009年），「門跡寺院実相院の機能と構造」（東四柳史明編『地域社会の文化と史料』同成社，2017年）など。

執筆者一覧（執筆順）

橋本政宣（はしもと・まさのぶ）

1943年生。東京大学名誉教授、舟津神社宮司、博士（歴史学）。

『近世公家社会の研究』（吉川弘文館、2002年、第一回徳川賞受賞）、『近世武家官位の研究』（続群書類従完成会、1999年）、『神道史大辞典』（共編、吉川弘文館、2004年）、『公家事典』（吉川弘文館、2010年）、「賀茂別雷神社と賀茂川」（『上賀茂のもり・やしろ・まつり』、思文閣出版、2006年）など。

嵯峨井建（さがい・たつる）

1948年生。京都國學院講師、博士（神道学）。

『日吉大社と山王権現』（人文書院、1992年）、「社寺行幸と天皇の儀礼空間」（今谷明編『王権と神祇』思文閣出版、2002年）、「中世上賀茂神社の神仏習合」（岡田精司編『祭祀と国家の歴史学』塙書房、2001年）、『神仏習合の歴史と儀礼空間』（思文閣出版、2013年）など。

黒田龍二（くろだ・りゅうじ）

1955年生。神戸大学大学院工学研究科教授、学術博士。

『纏向から伊勢・出雲へ』（学生社、2012年）、『中世寺社信仰の場』（思文閣出版、1999年）、『国宝と歴史の旅4 神社 建築と祭り』（朝日新聞社、2000年）、「発掘遺構から見る神社の成立」（『橿原考古学研究所紀要』16、八木書店、2013年）など。

京條寛樹（きょうじょう・ひろき）

1978年生。賀茂御祖神社（下鴨神社）権禰宜、京都國學院講師、修士（宗教学）。

「賀茂御祖神社の式年遷宮」（『世界文化遺産賀茂御祖神社 下鴨神社のすべて』（淡交社、2015年）、「賀茂御祖神社（下鴨神社）の式年遷宮について」（『聖地の入口 京都下鴨神社式年遷宮の祈り』主婦の友社、2015年）など。

かもしんこう れきし ぶんか
賀茂信仰の歴史と文化 神社史料研究会叢書第6輯

令和2(2020)年4月30日 発行

編者 橋本政宣・宇野日出生

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版
〒605-0089 京都市東山区元町355
電話 075-533-6860(代表)

印刷 株式会社 図書印刷
製本 株式会社 同朋舎
